

第2節 八ッ場ダム関連遺跡における陥し穴の調査の現状と課題

村上 章義

(1) はじめに

八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査において、2006年度までに陥し穴として報告された遺構の数は476基にのぼり、遺跡の数も10^⑨にのぼる。本遺跡の44基を含めれば、520基、11遺跡となる。八ッ場ダム関連遺跡の発掘調査は、現在も進行中であり、陥し穴として調査された遺構の数も増えつづけている。石田2004によれば、群馬県内における陥し穴の数量は、当時、1700基以上、130遺跡とされ、その後の、本遺跡を含めた八ッ場ダム関連遺跡の330基、7遺跡を加えれば、2030基以上、137遺跡となる。八ッ場ダム関連遺跡の陥し穴の数量は、県内の陥し穴の数量の4分の1近い数を占めていることになる。

数量もさることながら、八ッ場ダム関連遺跡における陥し穴の調査は、花畠遺跡、立馬遺跡における金属製工具痕の発見、立馬遺跡における埋没土最上位にAs-B、As-Kkを含み、平安時代住居を切る陥し穴の発見など、県内の陥し穴研究において、重要な成果を挙げている。

これらの成果を纏め上げて発表された石田2004は、従来、県内では漠然と縄文時代と比定されてきた陥し穴の構築／使用年代観に一石を投じ、八ッ場ダム関連遺跡においても、その後、平安時代を中心とする古代に比定される陥し穴の報告が増大し、逆に縄文時代に比定される陥し穴の数量が激減する（表1）など、大きな影響を与えていている。

石田2004以降、前述したように陥し穴の数量も倍近くに増え、石田2004の肝の一つとなった立馬I・II遺跡も正式に報告され、三平I・II遺跡の報告（篠原2007）における、陥し穴の埋没土上層にみられる「ローム質土レンズ状堆積層」の指摘など、新たな知見が増えてきたため、ここで一度、八ッ場ダム関連遺跡における陥し穴の調査の現状と課題をまとめてみたい。

(2) 陥し穴の認定基準

八ッ場ダム関連遺跡では、数多ある土坑のうち、陥し穴と推定される根拠は、上面の平面形、断面形、規模（長軸、短軸、深さ）、底部施設（「逆茂木痕」や杭痕と推定される「小ピット」）の存在などが挙げられている（諸田2002：149；石川2005：33；篠原2007：33、92）。

平面形については、代表的な形として橿円形・長橿円形・長方形・隅丸長方形が挙げられている（諸田2002：149）が、この四種類で実に8割以上を占める（表2）。

断面の形状については、具体的な言及はないが、とくに短軸の断面の形状が特徴的であり、壁が垂直に立ち上がる「箱形」、上方に向かって開く「逆台形」、途中まで垂直に立ち上がった後、上方に向かって開く「Y字形」でほぼ100%を占める（表3）。

規模としては、長軸が130～220cm、短軸が60～170cm、深さが50～160cmのものが多い（表4・5）。

「小ピット」を有する陥し穴の数は55^⑩基であり、わずか11%にすぎず、大多数の陥し穴は「小ピット」をもたない（表6）。

八ッ場ダム関連遺跡では、これらの特徴をあわせもつ土坑を主に陥し穴と認定している。

(3) 分類基準

これまで、7遺跡、5報告において分類案が提示されている（表7）。

上郷A遺跡を除けば、上面形の分類と短軸断面形の分類との組み合わせによる分類が主となっているが、上面形と短軸断面形との間には、相関関係があり、全ての組み合わせが存在するわけではない。

上面の長軸をX軸に、短軸をY軸に分布グラフ化したところ（表4）、上面長軸／短軸=1と上面長軸／短軸=1.2の間に円形と方形がおさまるため、

円形と橢円形の違いや、方形と（隅丸）長方形の違いも、横壁勝沼遺跡・花畠遺跡の分類（松原2002：153）のように短軸×1.2を基準とするのが妥当であると判断される。

また、立馬I・II遺跡や三平I・II遺跡において「溝型」「溝状」と分類される陥し穴は、上面形では「（長）橢円形」や「（隅丸）長方形」と大差ないため（表4）、分類の基準は下面の長軸・短軸比が鍵と推定される。下面の長軸を短軸で割った値をX軸、短軸をY軸として分布グラフ化したところ、明瞭な違いが表れた（表8）。下面長軸≥下面短軸×5.5の大きさが、陥し穴を「溝形」と分類する基準とするのが妥当と考えられる。

（4）構築／使用時期

群馬県内では、従来は、縄文時代と考えられていたが、花畠遺跡の報告（松原2002）、石田2004、立馬I・II遺跡の報告（飯森2006）によって、ハッ場ダム関連遺跡の調査では、大半は、縄文時代よりも新しい時代と考えられるようになった（表1）。

その根拠として、金属製の工具による掘削痕、埋没土中に含まれるテフラ、とくにAs-Kk（粕川）、年代の分かる遺構との切り合い関係などが挙げられている（松原2002、石田2004、石川2005、飯森2006、篠原2007）。

その他に、陥し穴の埋没土に着目して、構築／使用時期を推定する試みが行われている。

上郷A遺跡では、テフラ分析の結果と切り合い関係、覆土の観察によって、縄文中期以前から平安以前の陥し穴の変遷が明らかにされている（石川2005：123-124）。

三平I・II遺跡の報告（篠原2007）において指摘された、平安時代と推定される陥し穴の埋没土上層にみられる「ローム質土レンズ状堆積層」は、同報告によれば、花畠遺跡・長野原一本松遺跡・立馬I・II遺跡の陥し穴においても確認される（篠原2007：259）とされ、その堆積年代が判明すれば、陥し穴の構築／使用年代を推定する鍵層として重要

な役割もつものとして期待される。

現状では、陥し穴の構築／使用時期は平安時代から中世ごろまでを下限と考えられているようである。しかしながら、文献記録では古代（『日本書紀』卷二九 天武天皇四年四月庚寅《十七》；『続日本後紀』卷二 天長十年六月丙辰朔）から江戸時代（根崎2001：A7）まで、民俗記録では明治（萩原1938：23；田中1995：60-64）まで陥し穴が記録されている。

とくに、後者は、長野原町の隣村の六合村における民俗記録であり、今後、構築／使用時期が江戸時代や明治である可能性を見据えた調査を行う必要があろう。

（5）小ピット

陥し穴の底面には、しばしば小ピットの存在が報告される。小ピットの存在は、遺構が陥し穴と比定される根拠のひとつとしてあげられるものである。

ハッ場ダム関連遺跡においても、長野原一本松（1）・（2）遺跡、花畠遺跡、上郷A遺跡、立馬I・II遺跡、三平II遺跡において報告されている（松原2002、石川2005、飯森2006、篠原2007、小野2007）が、（2）で言及したように、その数は55基、11%にすぎない。

小ピットのみとめられる陥し穴は、数量的には、橢円形・長方形と溝形・円形との差は、9～13基と大きな差はないが、割合においては、溝形が39%、円形が17%と突出している（表6）。

小ピットに対する断ち割り調査が行われているのは、立馬I・II遺跡と三平II遺跡であり、いずれも溝形の陥し穴に対して行われた。断ち割りの結果、打ち込まれたものと推定される。

断ち割りによって、検出時には小ピットとされていたものが攪乱であったことが判明した（飯森2006：96）ことや、大多数の陥し穴に小ピットがみとめられないことから、断ち割らずに小ピットと認定することには慎重であるべきであろう。

(6) 今後の課題

構築／使用時期の絞込み

陥し穴の埋没土に対する記録と分析は行われているが、陥し穴が切る自然の土層に対する記録が全く行われていない。陥し穴に切られる土層と基本土層との対比を行えば、直接切り合っていない陥し穴どうしの前後関係を明らかにすることは可能であろう。

また、半裁後のプランの大きさと検出時のプランの大きさが著しく異なる場合、遺構確認面が掘り込み面よりも上位にある可能性があるので、埋没土の上位の層と遺構周辺の土層とが同じなのか切り合っているのかよく観察する必要がある。

再利用と貼壁

立馬I遺跡の16区104号土坑において明らかにされた(飯森2006:47-49)ように、貼壁と推定される特徴的な土層堆積がみとめられることがある。

版築やたたき土壘に似た構造のロームと黒土の互層から成ること、崩落しやすい As-YPk 層を覆っていること、この土層堆積によって、断面形が箱形から Y 字形になることから、人為的な貼壁と推定されるが、全体ないし一部を埋め戻した後に掘りなおしても同様の結果が得られるため、貼壁ではなく、再利用である可能性がある。以上の点をふまえて、土層セクションや「貼壁」の表面の観察を行う必要がある。

狩猟対象

陥し穴の狩猟対象として、イノシシ、シカ、クマが挙げられる。本州に生息するニホンイノシシは、頭胴長が120~150cm、肩高が60~75cm(仲谷1996:118)とされ、大多数の陥し穴の下部はイノシシの体がおさまる大きさとなっている(表9)。イノシシは1m程度の高さならば飛びこえることができ(江口2001:184-187)、ある程度の斜面も登ってしまうため、それを防ぐために長軸方向の壁は、オーバーハングしている可能性が考えられる。陥し穴の土層セクションは短軸でとられるのがほとんどであるが、長軸方向の壁の残存状況を調べるためにも、長軸で土層セクションをとる必要があると考える。

《参考文献》

- 群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
諸田康成、2002『長野原一本松遺跡(1)』
松原孝志、2002『ハッ場ダム発掘調査集成(1)』
石川正敏、2005「上郷A遺跡」(『久々戸遺跡(2)・中棚II遺跡(2)・西ノ上遺跡・上郷A遺跡』)
飯森康広、2006『立馬II遺跡』
神谷佳明、2006『上郷B・廣石A・二反沢遺跡』
飯森康広、2006『立馬I遺跡』
篠原正洋、2007『三平I・II遺跡』
小野和之、2007『長野原一本松遺跡(2)』
石田真、2004「群馬県北西部における陥し穴の構築時期をめぐって」(『研究紀要』22、群馬県埋蔵文化財調査事業団)
根崎光男、2001「近世農民の害鳥駆除と鳥獣観」『人間環境論集』1-2、法政大学人間環境学会
萩原進、1938「六合村断片」(『毛野』4-4、毛野研究会)
田中隆志、1995「六合村入山地区における伝統的狩猟」(『群馬歴史民俗』16、群馬歴史民俗研究会)
仲谷淳、1996「イノシシ」(『日本動物大百科2』平凡社)
江口祐輔、2001「イノシシの行動と能力を知る」(『イノシシと人間』古今書院)

①ハッ場ダム関連遺跡の調査では、石田2004を境に陥し穴の構築／使用年代観が大きく変質しているため、本稿では石田2004の前後に報告されている長野原一本松遺跡を二つの遺跡として取り扱った。

②小ピットに関しては、報告者による認定を基準としているため、本稿執筆時点において未報告である榆木II遺跡を除いた数値である。

第2節 八ッ場ダム関連遺跡における陥し穴の調査の現状と課題

表1. 陥し穴の構築／使用年代観の変遷

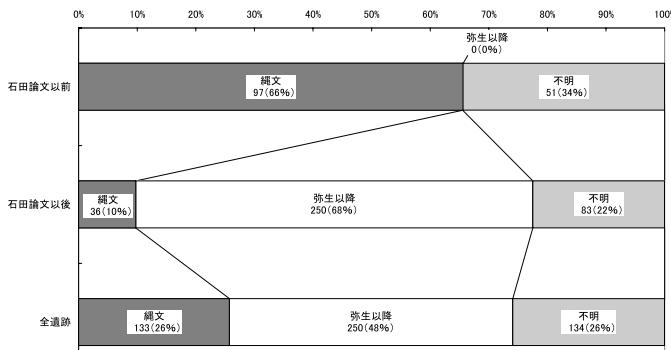


表2. 上面形

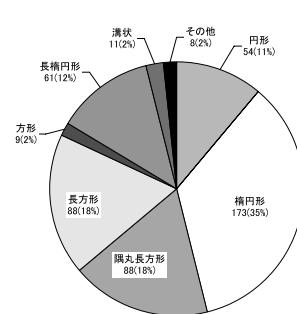


表3. 短軸断面形

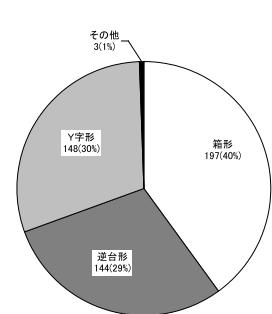


表4. 規模(上面長軸・短軸)

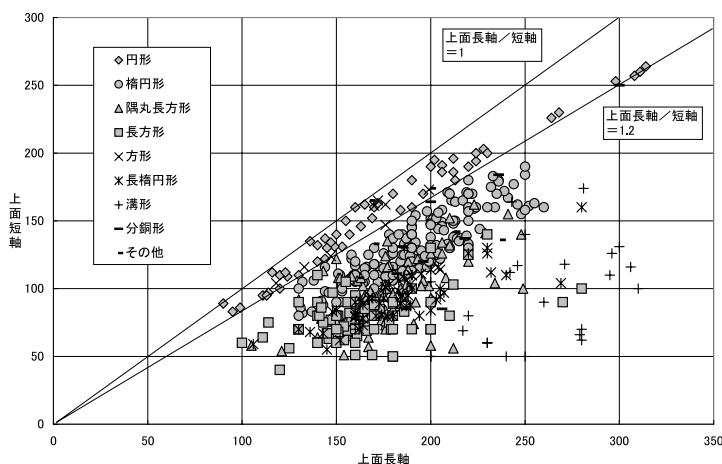


表5. 規模(下面長軸比・深さ)

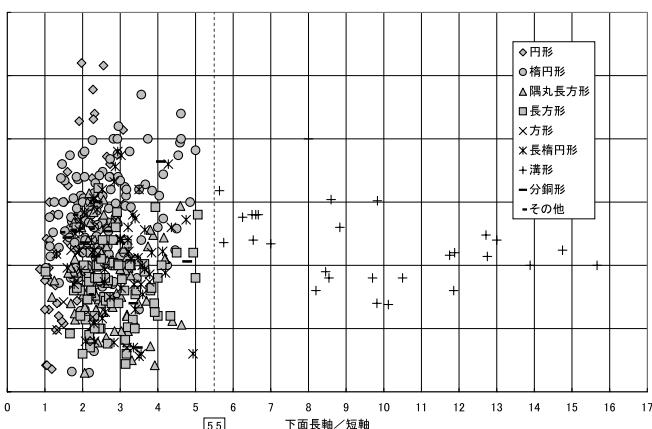


表8. 溝形の分布

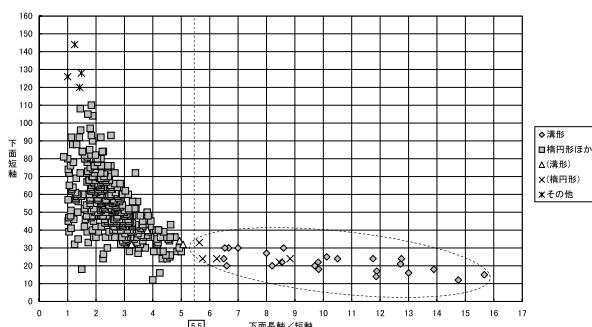


表6. 小ビットを有する陥し穴の割合

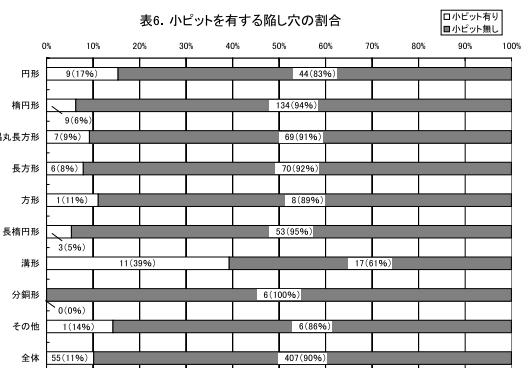


表7. 分類基準

	上面形	底面形	断面形	小ビット	深さ								
	円形	楕円形	隅丸長方形	細長い楕円形	その他	箱形	逆台形	Y字形	その他	単独	複数	深い	非常に深い
縄	A I	○				○							
縄縛	B I	○				○							
縄縛沼	B II	○				○							
花畠	B III	○				○							
	C I	○				○							
	D I		○			○							
	D II		○			○							
	D III		○			○							
	D II		○			○							
	A 2	○				○							
	D 2		○			○							
上郷	I類			○				○					
	II類			○				○					
	III類			○				○					
	IV類			○				○					
	V類			○				○					
	VI類			○				○					
	VII類			○				○					
	VIII類			○				○					
立馬	管	○		○				○					
	スリット	○		○				○					
	箱形1類		△	△				○					
	箱形2類	○	△	△				○					
	逆台形	△	△	○				○					
	溝状		○	○				○					
I 三	楕円型1類	○	○	○				○					
II 平	楕円型2類	○	△	△				○					
	溝型	○		△				○					
	筒型	○		○				○					

表9. 規模(下面長軸・短軸)

